

オランダ商館長の参府と江戸の蘭学

城西大学教授 永積 洋子

享保二年（一七一七）は、江戸の蘭学にとつて記念すべき年である。八代将軍徳川吉宗は、はじめてオランダ人を謁見する前に、五十六年以前にオランダ人が献上し、その後書物方に収められたまま誰も開いて見なかつたヨンストンの『動物図譜』を手にして、その精密な挿絵に感嘆した。ここに書いてある説明が読めればさぞ有益だろうと考へて、青木昆陽などにオランダ語を学ばせることにした。将軍は公式の拝謁のとき御簾をあげさせてオランダ人を直接見ただけではなく、その後日を改めてオランダ人を白書院に招き、さまざまな質問をするようになった。江戸では学者がオランダ人の宿舎長崎屋を訪問することが許され、オランダの書物、地球儀・天球儀をもつて来訪する人が絶えなかつた。吉宗は民に正確な時を授けるのは、将軍の重要な務めであると考え、曆の改正に熱心だった。そこで将軍はオランダのアルマナックを毎年注文し、自らも熱心に天体観測を行った。オランダ人は江戸でも長崎でもかつてないほどの自由を享受し、江戸城から宿舎まで歩いて帰ったり、長崎では毎日二百人の日本人が、用事のためだけで

はなく、単なる好奇心から出島を訪問するようになった。明和七年（一七七〇）十代将軍家治は馬術教師用の衣服二組を注文した。吉宗時代から将軍は度々馬を注文し、馬術師ケイゼルは三度来日して、江戸城内の馬場で騎乗し、日本人七〇人とともに寛永寺、五百羅漢寺などに遠乗りし、その乗馬姿は絵に描かれている。家治の注文した衣服一式は、この時ケイゼルが着ていたものと全く同じものである。しかし、家治時代にはオランダ人馬術教師はもはや江戸にいなくなつたから、これらの衣服は、この頃流行したオランダ趣味を、満足させるためだつたに違いない。これらの衣服は、将軍の親戚に当たり、蘭癖大名として知られる島津重豪に下賜されたらしく、森島忠良は『紅毛雑話』の付録「紅毛服飾之図」に、オランダ語のカタカナ書きの説明と共に、逐一写生している。しかし著者はこの衣服の所蔵者の名を伏せていた。この書が版行されたのは天明七年（一七八七）、田沼意次が失脚した翌年である。松平定信が老中になると、オランダ人が江戸に滞在中日本人がその宿舎を訪問するのは厳しく制限された。島津重豪は田沼意次と親しかつたから、森島はここに島津の名を記すのはばかつたのであろう。この衣装には、かつら二組も含まれていて、かつらの時代とは、オランダの歴史学者が停滯した十八世紀を、輝かしい十七世紀と対比して揶揄するの

に用いる表現である。『紅毛雜話』に描かれたかつらは、田沼時代の象徴のように思われる。

漢語洋書の日本への渡来

国際基督教大学教授 斯波義信

幕末・明治期の日本人は、中国で漢訳された洋書（中国では「西学書」という）を広く読んで国際知識を培っていた。有名な一例として、明治三年に大学規則が制定されたとき、その一科目に「万国公法」があった。これは一八五〇年、開国してまもない清国に來た米人宣教師のマーティンが、米人学者のホイートン著の『エレメンツ・オブ・インターナショナル・ロウ』を漢訳し、その一八六四年（同治三）の刊本を、翌六五年（慶応元）、幕府の開成所が訓点や地名人名の読音をつけて翻刻し、そのほかにもいくつかの訓点本などがあいついで発刊されていて、いまでいう国際法の概要が中国の漢訳書をへて周知されていたことを語っている。

中国で西学書を漢訳して印行するならわしは、マテオ・リッチの渡来（一五八三）から一七二四年の禁教までの時

期、そして一八四六年以降の宣教師の活動に対する制限の緩和の時期、という二つの昂揚期を伴って推移した。こうした西学書が実際にどのよいなものであったかは、梁啓超の『西学書目表』で知ることができる。

日本でもいわゆる鎖国の前、すなわち南蛮貿易そしてキリシタン文化華やかな時期から、宣教師の書物をはじめとする西学書が渡ってきた。しかし鎖国政策と前後して一六三〇年（寛文七）、キリスト教の教義書や兵書などの入国をさし止める禁書の制が布告される。禁書の大半はリッチの弟子、明末の李之藻が編纂した『天学初函』という叢書、五三巻であった。内容は『天主実義』などの教義書は当然ながら、ほかにリッチの『坤輿万国全図』を増補して世界五大洲の地理、風俗、産物を詳説したジュリオ・アレニの『職方外紀』などの世界地理の書、そして『幾何原本』をはじめ天文、算法、測量などの西洋科学書を収めていた。一六八五年、禁書の書目はさらに追加された。

幸いにといふべきか、八代將軍吉宗は一七二〇年（享保五）に禁をゆるめ、天文、曆学、算法などの実用的な西学書の輸入を認めるようにした。吉宗は先代の家継の発布した正徳新令のあとを承けて、貿易の引き締めと殖産興業に力を入れた。そして洋学を振興するとともに実用書と目される漢籍および漢訳西学書から知識を手に入れることに熱